

雜 錄

明治專門學校規程改正(官報第 2352 號)文部省令第九號(昭和 9 年 11 月 1 日)明治專門學校規程中次の通り改正す。

部	科	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九	第二十	第二十一	第二十二	第二十三	第二十四	第二十五	第二十六	第二十七	第二十八	第二十九	第三十	第三十一	第三十二	第三十三	第三十四	第三十五	第三十六	第三十七	第三十八	第三十九	第四十	第四十一	第四十二	第四十三	第四十四	第四十五	第四十六	第四十七	第四十八	第四十九	第五十
第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九	第二十	第二十一	第二十二	第二十三	第二十四	第二十五	第二十六	第二十七	第二十八	第二十九	第三十	第三十一	第三十二	第三十三	第三十四	第三十五	第三十六	第三十七	第三十八	第三十九	第四十	第四十一	第四十二	第四十三	第四十四	第四十五	第四十六	第四十七	第四十八	第四十九	第五十		

部	科	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九	第二十	第二十一	第二十二	第二十三	第二十四	第二十五	第二十六	第二十七	第二十八	第二十九	第三十	第三十一	第三十二	第三十三	第三十四	第三十五	第三十六	第三十七	第三十八	第三十九	第四十	第四十一	第四十二	第四十三	第四十四	第四十五	第四十六	第四十七	第四十八	第四十九	第五十
第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九	第二十	第二十一	第二十二	第二十三	第二十四	第二十五	第二十六	第二十七	第二十八	第二十九	第三十	第三十一	第三十二	第三十三	第三十四	第三十五	第三十六	第三十七	第三十八	第三十九	第四十	第四十一	第四十二	第四十三	第四十四	第四十五	第四十六	第四十七	第四十八	第四十九	第五十		

江西省礦產 狀況(昭和 9 年 9 月 10 日附在廣東、服部總領事代理報告)石炭埋藏量 江西全省の石炭埋藏量に關しては、未だ詳細且つ適確なる調査統計を缺く爲、其確實なる數量は固より之を知るに由なし、然共南京中央地質調査所の發行に係る中國礦業紀要に據れば、全省の石炭埋藏量は、約 989 億噸に達し支那全國の第 7 位を占むと云ふ。尤も其調査は僅かに萍鄉、樂平、吉安及豐城等の諸縣に對し行はれたるものにして、其他の宜春、萬載、武寧、上饒、玉山、新喻及高安並南部各縣に對しては、未だ調査行はれざる爲、前掲數量は正確のものと稱し難く、從て若し叙上宜春以下各縣の埋藏量を加算せば、恐

らく 3,500 億噸を突破するに至るべし。

同產出量 江西省の最大の石炭は萍鄉礦(同礦は同時に支那全國最大の石炭礦なり)にして、鄱陽及樂平の兩石炭礦之に亞ぎ吉安新喻、豐城及高安等諸縣の石炭礦は第三位にあり、先年漢陽製鐵廠が操業中の間には、萍鄉の一箇處のみにて毎日 3,000 餘噸の石炭を産出し居たるを以て、萍鄉礦の年産量は 60 餘萬噸に達すべし。其後兩湖時局の影響と、漢陽製鐵廠の操業中止とに依り、其產出量激減したりと雖も、常態に在りては本礦の維持は決して困難に非ざりしなり。然るに民國 19 年以後本礦は益々衰へ、而も礦區は常に共匪の騷擾を受け、且つ營業方面にありても、外來石炭の壓迫愈々甚しきを加へ、遂に採礦困難の狀態に立ち到れり。

尙鄱陽及樂平石炭礦の採掘を業とせる其公司も、亦屢々共匪の騷擾を受けたる爲、其產出量は著しく減少し來り到底昔日の比にあらざり、其他省内各地の小石炭礦も、容易に一定の產出量を維持する能はざるに至れり。是が爲、民國 18 年の江西全省の石炭產出量は、663,850 餘噸に激減し、同 19 年には更に 456,341 餘噸に減少し、同 20 年には 453,144 噸に漸減するに至り、其萎靡不振の狀態は想像外なり。

同生產原價 現時江西省各地の石炭生產原價は、國內他省のそれに比し稍高し、例へば萍鄉石炭は 1 噸に付洋銀 5 元 5 角、樂平石炭は同 5 元 8 角なり。

鐵礦 江西省の從來最も有名なる鐵礦としては、九江の城門山、萍鄉の山株嶺及瑞昌の陳家山等なり。是等鐵礦には礦質優良なる赤鐵を産出し、其埋藏量も亦頗る豊富なりと傳へらる、然るに之が積極的採掘は勿論、礦床の綿密なる調査さへ未だ行はれざりしが、近年南京全國經濟委員會は相當大規模の計畫を樹て、前掲諸鐵礦を開發すべく各般の準備を急ぎ居る趣なり。

タングステン礦及マンガン礦 タングステン礦は江西省特產礦物にして、調査に依れば、同礦物は同省南部の各縣に分布しありと云ふ。其產出量は往年世界總產出量の 3/10 を占むる由なりしが、民國 18 年には一躍して 5/10 (5,944 噸)に達し、同 19 年には稍々減少し 5,905 噸を算せり。

マンガン礦は同省の南部一帯に産出する外、東部地方の樂平縣等にも少なからず。民國 18、9 年には約 3 萬餘噸を産出したるも、同 20 年以降は共匪跋扈の爲、採礦不可能の狀態にあり。

金、銀、銅、鉛、礦 江西省にありては今の處、未だ此各種の礦石を發見するに至らざるも、將來專門技師を省内に派遣し、調査せしめば必ず何等か發見する所あるべし。

ニッケル、亞鉛、錫、礦 此各種の礦石は、江西省南部に産出するタングステン礦に附着せる一種の礦砂より産出する由なるも、其數量は極めて少量なりと云ふ。

叙上の外江西省の景德鎮及陪川諸縣には、陶土及耐火粘土を産出し、陶磁器業者及煉瓦製造業者に對し、好個の工業原料を提供し來れるも、近年來其産出量は漸次減少しつつある由なり。

(海外經濟事情 昭和9年第45號)

墨國鑛産狀況(上半年)(昭和9年8月23日附在墨 堀特命全權公使報告) 久しく沈靜状態にありし墨國鑛業界も、最近金銀の市價漸騰の途を辿るに至り、刺戟されて漸く活況を呈し來たり、1934年上半期の鑛産物は前年同期に比し著増せり、因て金、銀、銅、鉛、亜鉛の市價平均を前年度の夫に比較すれば次の通り。(米弗)

	1933年	1934年		1933年	1934年
金(毎オンス)	25.67	35.00	鉛(同)	0.038	0.041
銀(同)	0.35	0.45	鉛(同)	0.04	0.43
銅(毎封度)	0.07	0.08			

1934年上半期金、銀、銅、鉛、亜鉛の産額を前年同期に比すれば次の通り。

金(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	1,627	1,798	5月	2,162	1,559
2月	1,696	1,650	6月	1,727	1,485
3月	1,062	1,596	計	10,260	9,451
4月	1,986	1,363	増	609(8.5%)	

銀(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	194,552	222,673	5月	219,766	161,649
2月	168,367	172,532	6月	200,976	157,609
3月	139,803	200,191	計	1,166,787	1,058,592
4月	243,323	143,938	増	108,195(10.2%)	

銅(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	2,496,393	2,789,283	5月	4,031,096	3,372,664
2月	3,415,589	2,735,563	6月	4,537,959	3,579,369
3月	3,290,535	3,483,000	計	22,044,427	19,137,464
4月	4,272,855	3,177,585	増	2,906,963(約15.0%)	

鉛(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	13,356,582	9,826,401	5月	17,065,312	8,869,876
2月	11,473,871	8,736,812	6月	12,247,880	8,284,012
3月	11,310,776	9,923,787	計	83,059,566	52,721,033
4月	17,605,145	7,080,145	増	30,338,533(約57.54%)	

亜鉛(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	9,884,705	8,543,341	5月	14,799,855	6,599,630
2月	7,879,919	3,831,550	6月	12,193,928	7,982,284
3月	10,523,299	8,155,649	計	67,983,057	39,500,409
4月	12,701,351	4,387,955	増	28,482,648(約72.00%)	

銅、鉛、亜鉛の市價前年に比し著しき上騰を見ざるに、其産額の著増せるは是等金屬精練の際の副産物たる金、銀の市價著しく上騰せる爲なり。

尙前記5種金屬の價額に付、1934年上半期分を前年同期に比較すれば次の如し。(單位ペソ)

	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
金	41,944,029	22,978,058	亜鉛	24,881,803	10,188,855
銀	60,244,809	31,946,999	計	168,302,542	84,960,723
銅	14,214,571	7,429,762	増	83,341,819(98.00%)	
鉛	27,017,330	12,417,049			

次にアンチモン、次の如し。

アンチモン(單位担)	1934年	1933年		1934年	1933年
	上半期	上半期		上半期	上半期
1月	471,662	23,716	5月	376,667	75,756
2月	220,610	130,780	6月	148,379	219,425
3月	257,850	65,820	計	1,487,313	604,505
4月	42,145	89,608	増	882,808(146.60%)	

(海外經濟事情昭和9年 No. 45)

英國のヴィツカースと其系統會社(昭和9年10月10日附在英、松山商務參事官報告) 最近英國事業界は一般的に好況である

が就中飛行機製作、電氣機械、鐵鋼製品方面は特に活躍を示して居り隨て此等方面の關係會社は何れも良好の成績を擧げ、株價も最近著しく上騰して居る、左れば此等各方面の事業を管理し、特株會社として其統制の地位に在るヴィツカース會社の如きも、1923年改造當時の悲境を擺脫して漸次復活の氣運に進みつつある。

本社は1867年の創立に係り鐵鋼、造船、機械等の事業を經營し世界的知名の大會社で在る本邦海軍の金剛が同社の建造に係ることは周知の通りであるが、大戰當時事業擴張の後を承け、戦後一般的不況の影響により著敷き打撃を蒙り、1928年を改造の大刷新の必要に迫られ、其軍器及軍艦製造事業はアームストロング會社との合同經營に移され、又一般鐵鋼業は此アームストロングとの共同經營會社たるヴィツカース・アームストロング會社及カメル・レアード會社共同管理の下に、エングリシユ・スチール・コーポレーションを組織し、同社の手に委ねらるゝに至り、同時に其組織を改造して1個の持株會社となつたのである、現在本社の統制下に在る附屬會社次の通り。

Vickers-Armstrong Whitehead Torpedo Co. を管理す
Vickers Aviation Supermarine Aviation Works (Vickers) を管理す

Vickers (Ireland)

Vickers Train Lighting Co.

Robert Body & Co.

Cooke, Troughton & Simms British Separators を管理す

Joco Rubber & Waterproofing Co.

Thames Ammunition Works.

Variable Speed Gear

Placencia de las Arms (Spain)

又 Cammell Laird & Co. との共同經營事業次の通り。

Metropolitan-Cammell Carriage, Wagon & Finance.

其他の關係會社次の通り。

Associated Electrical Industries.

Vickers-Commonwealth Steel Co.

因にヴィツカース社の現在資本状態次の通り。

	公稱資本(磅)	現在資本(磅)
5分利優先株	750,000	750,000
同一磅株	750,000	750,000
5分利累積優先1磅株	7,000,000	6,863,807
普通株(1株6志8片)	18,000,000	4,105,161
以上株式資本計	26,500,000	12,468,966
5分半利第一抵當社債	2,000,000	2,000,000
4分利同上	1,250,000	1,237,547

過去3箇年(12月末現在)の資産状態及収益の要目次の通り。

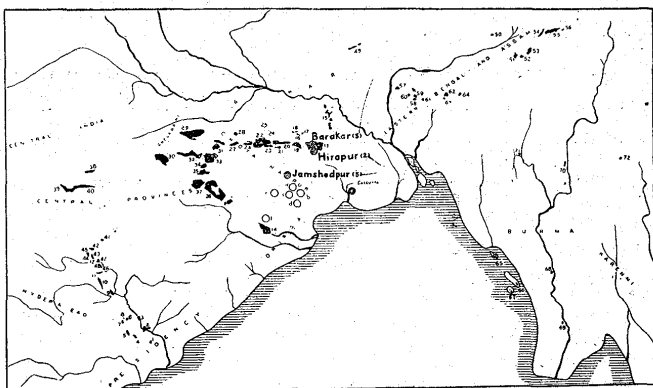
	1933年	1932年	1931年
	(磅)	(磅)	(磅)
Vickers-Armstrong 株	6,732,870	6,732,870	6,732,780
Metropolitan Cammell Carriage, Wagon & Finance 株	2,526,220	2,561,220	2,586,220
其他の附屬會社株	2,604,915	2,603,330	2,642,820
社債及所有債券	1,411,250	1,250,000	900,000
計(内資本積立金250萬磅を差引たる分)	10,775,225	10,647,420	10,361,910
現金	858,315	2,964,420	552,630
英國政府公債	5,184,455	1,631,645	3,560,450
積立金	1,100,000	1,100,000	1,100,000
純益(税金控除)	543,365	529,040	574,495
優先株配當	418,190	418,190	418,190
社債利子	172,200	172,500	172,500
繰越金	224,040	222,020	234,330

(海外經濟事情 昭和9年 No. 47)

英領印度の製鐵工業 (採鐵冶金月報第 15 年第 10 報澤村宏) 製鐵資源。

鐵礦 印度の鐵礦埋藏量は未だ調査不十分で明でないが然し其量は極めて大であると想像され Calcutta を東北隅とする東西 400 哩南北 200 哩の地域内に存在する富鐵のみにても 200 億噸に達すると推算せる學者がある。就中現今の製鐵工業に最も重要なものは Bihar Orissa 州に跨る鐵礦床であるが鐵 60% 及それ以上含む富鐵のみで其埋藏量 30 億噸以上に上ると稱せられて居る。此鐵礦の名稱及位置は第 1 圖及第 1 表の如くであつて現今盛んに開發されて附近の製鐵工場に供給されて居る。

第 1 圖



() 内は熔鐵爐數を示す

第 1 表

原料種類	第 1 圖中	産地	原料種類	第 1 圖中	産地
鐵礦	a	Gorumahisani, Bissai, etc.	石炭	31	Central Provinces
	b	Okampad, Surajpat, etc.		32	Tatapani
	c	Badampahar, Dumera, etc.		33	Kurassia (Korea) & Jhilmilli
	d	Kumadabadi		34	Bisrampur (Sirgaja)
	e	Kohlan-Keonjhar Bonai Area		35	Lakunpur
	f	Pal Lahara		36	Rampur
石炭	1	Madras	37	Rampur (Raigarh & Hingir)	
	2	Bedadanol	38	Korba	
	3	Madaveram or Damercherla	39	Mohpani	
	4	Lingalla Hyderabad or Nizam's Territory	40	Shapur or Betul	
	5	Kunnigiri	41	Chindwara	
	6	Singareni	42	Bandar	
	7	Alapalli	43	Warora	
	8	Kamaram	44	Ghngus	
	9	Bundella	45	Wun	
	10	Chinur	46	Between Wun and Papur	
	11	Tandur	47	Junara and Chicholi	
	12	Aksapur	48	Sasti and Ballar pur	
	13	Antargoon (Sati)	49	Paoni	
	Bengal	14	Raniganj (partly in Bihar & Orissa)	50	Pankabari etc. Darjiling
		15	Bihar & Orissa	51	Darjeeling, Dikrang Daphla
		16	Talchir	52	Dissi
		17	Rajmahal Hills include five semidetached fields North of the Damuda Valley	53	Janji
		18	Sahajori, Janti	54	Nazira
		19	Kundit Kuriah	55	Jaipur
		20	Giridih	56	Makum
		21	Jharria	57	Namchik R.
		22	Bokaro	58	Harigoan
		23	Ramnagar	59	Siju
		24	Karanpara North	60	Daranggiri
		25	South	61	Rongrengiri
		26	Chope	62	Umblay
		27	Ithkuri	63	Mao-beh-larkar
		28	Auranga	64	Cherrajunji etc.
		29	Hutar	65	Lakadong etc. Jaintia Hills.
		30	Daltonganj	66	Baronga Islands
Central India	31	Singrauli	67	Ramri Island	
	32	Umaria & Sohagpur etc.	68	Cheduba Island	
	33		69	Thayetmo	
	34		70	Henzada	
		71	Thingadaw (Kabwet)		
		72	Chindwin R.		
			Lashio, etc. N. Shan States		

鐵石は大部分含鐵高き赤鐵礦であるが今 1925 年頃 Tata Iron

and Steel Co. の Jamshedpur 工場にて使用せる此鐵石の 1 ケ年平均成分を示せば第 2 表の如くである。

第 2 表 印度産鐵礦 1 ケ年平均成分 %

鐵山名	Fe	Mn	P	SiO ₂	Al ₂ O ₃
Gorumahisani	59.59	0.50	0.066	4.25	4.04
Badampahar	56.33	0.54	0.093	4.93	4.57
Sulaipat	65.67	0.15	0.065	2.66	1.59

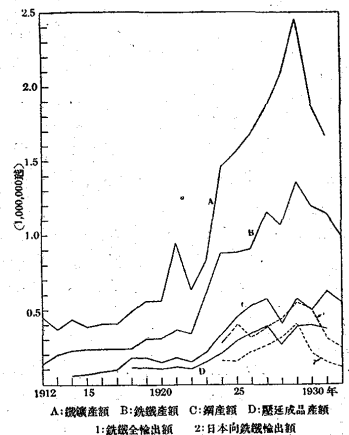
此國の鐵礦斯の如く豊富な故に其の製鐵工業が要求する鐵礦は全々國産を以て満す事が出来、外國鐵を必要としない 1912 年以降鐵礦産額は第 2 圖の如くであるが將來此國産鐵工業が益々發展しやうとも鐵礦供給に關しては何等の憂か無いのである。

寧ろ此豊富な資源を大に開發して鐵礦を輸出しやうとの企も考へられてゐるが現在馬來半島の富鐵を抑壓して日本に市場を求める事は不可能であり又歐米に進出するは更に困難と考へられる。結局此鐵礦は現在の狀態に於ては單に印度國內の製鐵工業の利用に待つより途がないのである。

石炭 石炭の埋藏量も亦極めて大であると考へられて居るが現今地表下淺き部分に於ても少くとも 790 億噸の存在が推定されて居る

現在の製鐵工場を中心とする炭田名稱及位置は第 1 圖及第 1 表の如くである。矢張り Bengal 及 Bihar Orissa 州に於ける炭田が現在最も盛んに開發されて居る。即ち 1927 年に於ける全産額は約 2,240 萬噸であるが其の 65.8% を Bihar Orissa 州 25.2% を Bengal 州が占めて居る。第 3 表の如く年産額は近年約 2,000 萬噸内外で 60 萬噸外を輸出して居る。輸入額は約 20 萬噸以下の少額である。主なる輸出先は第 4 表の如く香港 Ceylon 島等で輸入炭の主なるものは南亞聯邦産、英國産等である。

第 2 圖



現在最も盛んに開發されて居る。即ち 1927 年に於ける全産額は約 2,240 萬噸であるが其の 65.8% を Bihar Orissa 州 25.2% を Bengal 州が占めて居る。第 3 表の如く年産額は近年約 2,000 萬噸内外で 60 萬噸外を輸出して居る。輸入額は約 20 萬噸以下の少額である。主なる輸出先は第 4 表の如く香港 Ceylon 島等で輸入炭の主なるものは南亞聯邦産、英國産等である。

第 3 表

年代	石炭(1,000 噸)(1)			骸炭産額 (1,000 噸)
	産額	輸出額②	輸入額②	
1926	21,336	628	197	554
1928	22,905	636	213	758
1931	21,716	446	89	1,330
1932	20,477	526	48	1,234

①小額の褐炭を含む ②小額の骸炭を含む

第 4 表① 石炭 (1932 年)

國名	輸出額噸	輸入額噸
Ceylon	193,290	—
香港	222,147	—
Philippines, Guam	29,509	—
海峽植民地	13,268	—
南阿弗利加聯邦	—	8,758
英國	—	18,802
濠洲	—	4,135
其他	67,621	16,612
合計	525,835	48,307

①小額の骸炭を含む

併しながら此國の石炭の大部分は非粘結質で粘結性石炭は Jharria, Ramnagar, Raniganj, Lakunpur 等小數の炭田に限られて産

其全埋藏量僅に 10 億噸に過ぎない點は此國鐵工業に對し一大不安を興へて居る。現在の製鐵工場は何れも大部分 Jharia 炭一部は其他の粘結性石炭を原料として製造せる骸炭のみを消費し、外國産骸炭を全く用ひて居ない、近年に於ける産額は第 3 表の如くで 100 萬噸内外である。

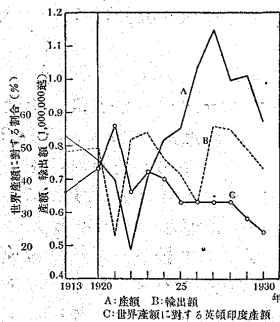
第 5 表の如く概して其灰分高く 20% 或はそれ以上であり、燐分又比較的多きが特徴である。

第 5 表 印度骸炭成分

原料石炭	F.C	V.M	S	Ash
Jharia	71.00	1.50	0.50	21.40
Raniganj	78.74	0.34	0.61	20.31

尙此國の Central Provinces, Madras, Bombay の諸州 Mysore, Bengal, Burmah 等の各地には多額のマンガン鐵が埋藏されて居り、之が爲め印度は世界有数のマンガン産地並に輸出國である。今近年に於けるマンガン鐵産額並に輸出額を示せば第 3 圖の如くである。

第 3 圖



製鐵工業 現在此國には第 6 表第 3 圖に示す如く三大近代的製鐵工場が存在するに過ぎない。其最も大なるは Tata Iron and Steel Co. の Jamshedpur 工場でこれは粘結性石炭田と Bihar-orissa 鐵産地との中間に位し又 Bengal Iron Co. の Barakar 工場及 Indian Iron and Steel Co. の Mirapur 工場は共に粘結性石炭田地に存在し、何れも上述の二大製鐵資源で養はれて居る。

尙 Indian Iron and Steel Co. の Managing agent なる Burn and Co は數年前 Bengal Iron Co. の Managing agent なる Martin and Co. と融合せる故此等二製鐵會社は緊密なる關係にあるのである。Mysore の Bhadravati に於ても官營の一製鐵工場が設立されて居るが之は容量小なる木炭熔鐵爐を備へて居るに過ぎない。

第 6 表

工場位置	會社名	熔鐵爐		製鋼爐		歴延工場
		基数	年容量 (千噸)	種類	年容量 (千噸)	
Jamshedpur	Tata	5	1,300	平爐	370(?)	×
Barakar	Bengal	5	300	轉爐	—	—
Hirapur	Indian	2	370	—	—	—
Bhadravati	Mysore Government	③1	23	—	—	—
Jamalur	East Indian Railway	—	—	平爐	6	×

①第 1 圖参照 ②×は存在 ③木炭熔鐵爐

1912 年以降鉄産額は第 2 圖の如くであるが第 7 表の如く鑄物鉄が其過半を占めて居る。

第 7 表 産額 噸

鉄種	1926 年	1930 年	1931 年
鑄物鉄	1,101,294	887,628	547,138
鹽基性鉄	312,505	306,451	527,842
合金鉄	3,688	4,649	14,596
合計	1,417,487	1,198,728	1,089,576

鉄輸入額極めて小なるに反し第 2 圖の如く産額の一を輸出せる點は世界の一例特例と云ふべきである。主なる輸出先は第 2 圖の如く日本であるが之に亞で米國、英國等である。我國に於ける輸入鉄の内最も多きは矢張り印度鉄で印度製鐵工業は我國の製鐵工業に對し常に大なる脅威を興へて居るのである。

製鋼工業及加工々業 此國製鋼工業の歴史は極めて若く 1912 年 Tata Iron and Steel Co. の Jamshedpur 工場に於ける製鋼爐の操業開始其濫觴を發して居る。其後各地に製鋼工場が設立されたのであるが何れも其規模は極めて小さく現在鋼産額の大部分は Tata Iron and Steel Co. の Jamshedpur 工場で産して居る、1914 年以降産額は第 2 圖の如くであるが第 8 表の如く其約一部は平爐法により過半は轉爐平爐による特種二段製鋼法によつて製造されて居る。

第 8 表 産額 噸

鋼種	1929 年	1930 年	1931 年
平爐鋼	256,187	238,023	219,706
2 段製鋼、鋼	324,534	387,676	411,792
鋼鑄物	3,794	3,121	3,652
合計	584,515	628,825	635,150

歴延工場も亦 Tata Iron and Steel Co. の Jamshedpur 工場以外に大工場が存在しないので此國に於ける歴延品の大部分は此工場より出されて居る。鋼塊は勿論半製品の輸入額は極めて少なく専ら國産鋼塊を原料として居る。歴延製品産額及成品種類は夫々第 2 圖及第 9 表の如くである。

第 9 表 産額 噸

鋼材品種	1929	1930	1931
Billets, Blooms, Slabs.	1,152	—	—
Sheet, bars	—	—	33,241
Tinplate bars	53,900	65,424	41,765
Rails (Heavy)	144,074	116,544	71,599
Rails (Light)	1,923	2,259	190
Sleepers and Fishplates	10,911	9,636	2,364
Angles, Channel and Tees	40,146	51,627	41,144
Girders, Joists and Beams	18,263	27,197	66,293
Rounds, Squares and Flats	78,231	75,747	82,058
Forgings	395	2,967	18,601
Steel plates > 1/8"	31,713	34,192	27,949
" < 1/8"	17,987	25,306	22,609
Galvanized sheets	17,955	24,968	28,123
Tinned plates	35,052	40,610	38,882
合計	453,702	474,477	474,833

即ち軌條等の鐵道用鋼材及構築用鋼材産額最も大で鋼管及帶鐵等は未だ製造されて居ない様である。

此國では労働賃金、原料費等低廉なるが爲に鉄鐵の製造原價極めて低い。従つて鋼材も亦安價に製造せられる。例へば第 10 表①は Tata. が 1933 年 1 月より 6 ヶ月間に亘る操業の結果によつて得

第 10 表

品 種	Tata Iron and Steel Co. 生産費 (昭和 9 年 1-6 月)				推定 關稅 生産費			
	①		②		③		④	
	噸	Rs	噸	Rs	噸	Rs	噸	Rs
鉄	④	8.08	5.90	10.50	8.03	5.86	10.44	
鉄	18.62	13.59	24.21	18.31	13.37	23.80		
平爐鋼塊	40.91	29.86	53.18	36.57	26.70	47.54		
2 段法鋼塊	35.58	25.97	46.25	34.01	24.83	44.21		
鋼塊平均	37.22	27.17	48.39	34.79	25.40	45.23		
Rails	64.80	47.30	84.24	56.00	40.88	72.80		
Fishplates	93.20	68.04	121.16	86.52	63.16	112.48		
Structural sections	65.90	48.11	85.67	60.00	43.80	78.00		
Bars	64.61	47.17	83.99	59.63	43.53	77.52		
Plates	73.44	52.71	95.47	62.57	45.68	81.34		
Tinplate bars, Billets	48.92	35.71	63.60	44.86	32.75	58.32		
Black sheets	95.78	69.92	124.51	85.54	62.44	111.20		
Galvanized sheets	125.78	91.82	163.51	115.54	84.34	150.20		
Sleepers	59.82	43.67	77.77	55.86	40.78	72.62		

①すべて英噸 ②平價換算 ③昭和 9 年 9 月 1 日爲替相場 ④ Jamshedpur 工場に於ける鉄炭爐の鉄炭生産費は總當 7.78Rs であるが一部の鉄炭を他より購入するが故に 8.08Rs となる。

られたる各種製鐵原料並に製品の平均生産費である。

印度稅關吏は之を査定して今後第 10 表②に示す成績を擧ぐるは敢て困難でないと推定して居る。

鐵鋼品の製産費斯の如く安價なるに不拘此國は鋼材輸入の一途を

進み其額多きは第 11 表の如く 100 萬噸にも及んで居るのは此國の製鋼及加工工業未だ發達不充て其の成品は國內需要の一半をも満す事が出来ないからである 鐵鋼輸入品の主なるものは亞鉛引鐵板各種構築材であるが第 7 表の如く其 1 半は英本國から來てゐる、之に亞で白耳義が多い。

此國の鐵鋼輸入品に對する關稅率は概して外國産に比べて英本國産に寛大である、英本國産輸入品極めて多きは全く此理由に他ならない。

第 11 表

年 代	總 額 (1,000噸)	内 譯 %			
		英 國	白 耳 義	獨 逸	佛 國
1913—1914①	1,034	59.8	17.0	19.6	0.1
1928—1929	1,189	28.5	28.5	6.0	4.6
1929—1930	989	49.9	32.1	6.0	3.6
1932—1933	331	43.0	31.9	6.7	3.7

①會計年度 3 月 31 日終る

結言 印度には富鐵鑛の大鑛床があるが粘結性石炭埋藏量大ならざるが爲め將來大製鐵國に發展するとは考へられないが然し現在の製鐵工場の勞力費原料費が共に低い爲めに銑鐵が極めて廉價に出来るから印度銑鐵の輸出、特に我國への進出は將來も尙繼續されるだらう。製鋼及加工工業は國産品を以て國內需要を満す迄は容易に發展すべきだが今日尙其需要の一半に達しない其れは英本國は保護關稅制に依り他より輸入を防いでゐるからである其れに依つて英本國は多大の利益を占めて居る事は注目すべきである。

尙此國の製鐵工業は凡て國産原料を以て遂行してゐるので此點露西亞以外は其類例極めて乏しい。

世界非鐵金屬界の形勢 ドイツ・フランクフルトの金物株式會社が毎年發表する統計年報最近公刊第 35 回年報(1933 年)に依れば景氣恢復を窺はれる但し錫とアルミニウムは生産制限協定にて例外として昨年の生産及消費を一昨年に比せば次表の如く何れも増加を示す。

世界金物精鍊高(單位 1,000 噸)

年次	銅	鉛	亞鉛	錫
1913	1,018.5	1,185.6	1,000.8	132.5
29	1,894.7	1,742.2	1,457.3	195.1
30	1,578.0	1,646.5	1,400.1	179.6
31	1,376.1	1,376.1	1,000.5	156.2
32	929.0	1,148.5	781.5	106.0
33	1,049.7	1,148.8	986.5	100.1

世界金物消費高(單位 1,000 噸)

年次	銅	鉛	亞鉛	錫
1913	1,041.7	1,182.0	1,001.0	122.1
29	1,761.9	1,699.9	1,439.8	183.8
30	1,440.2	1,520.5	1,228.2	100.6
31	1,242.7	1,291.2	1,022.3	133.6
32	902.2	1,093.3	827.5	114.7
33	1,068.0	1,202.2	1,006.0	144.8

世界四大ブロックとしたの見方 該年報より世界ブロックに別けて見ると 1933 年非鐵金屬界が著しく恢復して居るが 1929 年に比較すれば未だ低位である。例へばアルミニウムと錫の生産高は 1929 年に比し約 40% の減少を示し其他銅 45% 鉛 34% 亞鉛 32% の減少してゐる而して其産地別も平等で四大ブロックに別けて統計したものは次表である。

金物精鍊高の減退

生産國群	銅	鉛	亞鉛	錫
米國及中南米	32.9	41.9	52.4	—
歐洲(白領コンゴ、 チュニス及蘭印を含む)	84.1	86.1	67.3	117.1
英 帝 國	224.7	96.6	98.0	40.5
ロシア、日本、其他アジア	99.0	121.5	170.1	115.6
世界全體	55.4	65.9	67.7	51.3

1929 年を 100 とする 1933 年の精鍊高割合

1. 米國減退の主因は (イ) 鑛業界は餘り引合はぬこと (ロ) 或種原鑛は埋藏量貧弱且技術的發展の最大限度に達したこと (ハ) 金物消費國に於ける關稅障壁や消費諸國自身の生産の増加並に大消費者たる主要歐洲諸國の米國以外の競争勢力が増大すること、(ニ) 殊に最大の非鐵金屬輸入ブロックたる歐洲大陸諸國への諸輸出國からの輸出割合に大變化が齎され其れが生産減退の一大原因とされてゐる。

但しメキシコ及び中南米諸國はアメリカよりも遙に良好な状態である。

2. 歐洲は米國に反し歐洲經濟ブロックに於ける其れは良好な發展をして居る。之は主として多くの諸國は經濟的自給自足運動の發展によるものである。其の生産の重要たる事實は錫の生産が 1929 年より 17.1% を増大したことであるが之は蘭印産の錫鑛が最早精鍊のために海峽植民地に輸送される様な事なく蘭領内に於て全部が蘭印又は本國(アーンヘム市)に於て精鍊されることの反映である、又ベルギー領コンゴの生産高も急速に増大してゐるから世界錫精鍊工業に占めるヨーロッパ・ブロックの地位は本年は更に改善されるものと見られる最近の報告によればコンゴの錫生産高は昨年の 2 倍である。

3. 英帝國の最も大きな特徴は銅生産額が 1929 年の 134.7% の増加であつて之は 1929 年以來の世界金屬生産界に於ける最大の發展である此の増産は主として北ローデシアの探鑛が 1929 年の 5,600 噸から 1933 年の 105,900 噸に増加したからである。此發展は未だ行詰らず將來世界銅市場に於ける英帝國の地位を更に強化するであらう尙ほカナダの銅精鍊高の減、増も極めて重要なことである。一方英帝國の鉛及び亞鉛生産高も良好な發展をして居るが之は大規模な合理化と帝國外の鉛及び亞鉛に 10% の關稅を附加したことによる又本國以外の錫精鍊高の減退は從來蘭印が海峽植民地に輸送してゐた錫鑛の供給が停た爲めである。

4. 露西亞及亞細亞 最後に蘇聯邦、日本その他亞細亞の獨立國を一聯とせる經濟ブロックを見るにこれも進展を見せ就中蘇聯邦の進展は著しい。然し之のブロックの進展は寧ろ相對的で未だ世界の市場に重要な影響を及ぼす程でない。

以上四大別にした變化は次表の如し。

生産國群	地域別精鍊高割合 (%)			
	銅	鉛	亞鉛	錫
米 國 群	1929 74.6	52.1	39.9	—
	1933 44.4	33.1	31.1	—
歐 洲 群	1929 13.6	23.0	44.2	10.2
	1933 20.5	30.0	43.8	23.3
英 帝 國	1929 6.2	24.0	13.9	85.9
	1933 25.1	35.2	20.1	67.8
露 日 群	1929 5.6	0.9	2.0	3.9
	1933 10.0	1.7	5.0	8.9

非鐵金屬の將來 然らば斯る變化は單に經濟恐慌の一時的な結果か又供給資源の恒久的な多少變化か? と云ふ問題には最後の回答は出來難いが恒久的な影響ではないが然し重要な最近の發展としてはアルミニウム新工場設立、中央アメリカ及び加奈陀に於ける銅産急増、蘇聯の金屬工業發展、蘭印産の原鑛を蘭領内に處理等は恒久的な影響を及ぼすものである。

獨逸鋼鐵生産高 獨逸鐵鋼協會發表次の如し。

鐵鋼生産高(單位噸)

		1934 年 9 月	1 月以降累計	昨年同期	
銑 鐵	鋼	776,000	6,237,000	3,732,000	
銑 鐵	鋼	976,000	8,619,000	5,411,000	
月別生産					
年 月	銑鐵	鋼鐵	年 月	銑鐵	鋼鐵
1933 年 9 月	457,000	632,000	1934 年 3 月	650,000	930,000
10	492,000	715,000	4	697,000	977,000
11	510,000	725,000	5	737,000	989,000
12	534,000	731,000	6	718,000	1,003,000
1934 年 1 月	543,000	817,000	7	767,000	1,036,000
2	550,000	823,000	8	799,000	1,068,000
			9	776,000	976,000

内外最近刊誌參考記事目次

- Blast Furnace and Steel plant, July-Aug., 1934.**
 Reversing Drives for Blooming Mills. Fox. No. 7, p. 383; No. 8, p. 445.
 Manufacture of Full Finished Steels. Mort. No. 7, p. 389; No. 8, p. 452.
 Characteristics of Carbon and Alloy Steels. Bain. No. 7, p. 392; No. 8, p. 456.
 Finishing Heat of Steel, Part 22 and 23. No. 7, p. 395; No. 8, p. 454.
 Effect of Various Alloys in Steel. Deuble. No. 8, p. 439.
- Iron and Steel Industry, No. 10, July, 1934.**
 Making an Oval Retort. Whitehouse. p. 319.
 Rolls for Cold Rolling. Bradbury. p. 321.
 Steel for Deep Drawing. p. 322.
- Trans. Am. Soc. Metals, No. 8, Aug., 1934.**
 Heat Transfer Rates in Fuel-Fired Furnace. p. 673.
 Premature Precipitation in Supersaturated Solution—The Inclusion Period, Part I Burns. p. 728.
 Quenching Steel in Hot Lead. Hughes and Dowdell. p. 737.
 The Determination of Graphitization Rates in White Cast Iron. Pennington and Jennings. p. 751.
- Archiv, Eisenhüttenwesen, 8. Jahrg., Heft 1 und 2. Juli-Aug., 1934.**
 Der einfluss der Garungszeit auf die Eigenschaften des Koks und dessen Eignung für Giessereizwecke. Homborg. s. 49.
 Die Erzeugung von Werkzeugstahl im kernlosen Induktionsofen. Bardenheuer u. Bottenberg. s. 1.
 Die Oxydationsstufen des Eisens in Schlacken in Abhängigkeit von der chemischen Zusammensetzung, der Temperatur und der Ofenatmosphäre. Salmang u. Kaitenbach. s. 9.
 Ein Einfaches Analysenverfahren für technische Gasuntersuchungen. Schwiedewissen u. Barth. s. 15.
 Die Ermittlung des Soll-Wärmeverbrauchs für die Zwecke der Warmestatistik. Neumann. s. 57.
 Verbesserung der aufnahmen mit Röntgen- und Gammastrahlen durch Schwermetallfilter. Berthold. s. 21.
 Zusammenhang zwischen Gitterparameter und Ferromagnetismus. Köster u. Schmidt. s. 25.
 Die magnetischen Eigenschaften des Gusseisens. Söhnchen. s. 29.
 Einfluss des Untersuchungsverfahrens auf den gemessenen Wärmeinhalt des Eisens. Esser u. Bungardt. s. 37.
 Die zweistoffsysteme Eisen-Kupfer und Eisen-Antimon. Vogel u. Dannöhl. s. 39.
 Grundsätzliche Untersuchungen des Verschleisses auf der Spindel Machine. Eilender, Oertel u. Schmalz. s. 61.
 Untersuchungen über Gleichgewichte des Eisens und Sauerstoffs mit Silizium, Kalzium u. Phosphor. Kanz, Scheil u. Schulz. s. 67.
 Die Wandstärkenempfindlichkeit getrennt gegossener Gusseisenproben und ihre Beziehung zur chemischen Zusammensetzung. Heller u. Jungbluth. s. 75.
 Das System Eisen-Kupfer-Antimon. Vogel u. Dannöhl. s. 83.
 Das betriebswirtschaftliche Kostenbild im Dienste des Ingenieurs und des Kaufmanns. Lechner. s. 41.
- Stahl u. Eisen. 54. Jahrg., Juli-August, 1934.**
 Neuzeitliche Speisewasseraufbereitung. Hofer, Heft 27, s. 701 u. Heft 28, s. 729.
 Wandlungen im Welthandel von Eisen und Stahl. Reichert. Heft 27, s. 709.
 Weitere Untersuchungen über die Metallurgischen Verlauf des Thomasverfahrens. Bardenhauer, u. Thanheiser. Heft 28, s. 729.
 Wissenschaft und Fortschritt. Heisenberg, u. Görens. Heft 29, s. 749.
 Der Roststabverbrauch bei Dwight-Lloyd-Sinterbändern. Paschke, u. Schiegries. Heft 30, s. 773.
 Alterung und Warmzugfestigkeit von Stahlguss. Knipp. Heft 30, s. 777.
 Gemeinschaftsarbeit zwischen ölverbrauchender und ölverarbeitender Industrie. Baum. Heft 31, s. 797.
 Das Rahmenlager mit Druckschmierung für Walzwerke. Weinlig. Heft 31, s. 801.
 Anwendung von Stahlrekuperatoren auf Eisenhüttenwerken. Müller-Berghaus. Heft 32, s. 822.
- Der Zeitricher Verlauf des Zementitverfalls im Gusseisen. Heft 32, s. 827.
 Wolfram- und Chromlegierungen in der Edelstahl-erzeugung. Matuschka. Heft 33, s. 845.
 Das Schärfen der Kaliberflächen bei Block- und Vorwalzen. Holzweiler. Heft 33, s. 853.
 Gasmaschinen mit Wasserkolben. Stauber. Heft 34, s. 869.
 Eigenspannungen in Schweissnähten. Bollenrath. Heft 34, s. 873.
 Genauigkeitwaltung. Nöll. Heft 35, s. 893.
 Was hat die eisenschaffende Industrie von dem Reinhardt-Plan zu erwarten. Siebrecht. Heft 35, s. 898.
- Metal Industry (New York) June, 1934. (田中)**
 Press Casting Brass and Other Copper Base Alloys. Charles Pack. pp. 199-201.
 A Brass Foundryman's Progress. Otto Gerline. pp. 202-204.
 The Welding of Copper. J. F. Springer. pp. 205-206.
- Metal Industry (New York) July, 1934.**
 Metal Cleaning and Metal Cleaning Compounds. H.C. Bernard. pp. 235-236.
 The Recovery of Smelter Dust and Oxide at a Secondary Metal Plant. William Romanoff and C. O. Thieme. pp. 237-239.
 The Use of the Microscope in Electroplating. W. C. Ferries. p. 239.
- Metal Industry (New York) August, 1934.**
 The Effect of Some Mill Variables on the Gauge of Sheet Brass. C. K. Skinner. pp. 263-265.
 Welding of Commercial Yellow Brass Pipe. pp. 267-269.
 New Sheet Lead Mill. Flemm Lead Co. pp. 270-271.
 Treating Waste from Silver Manufacture. Ernest A. Smith. pp. 272-273.
 The Nickel Plating of Zinc in a Barrel. Albert Hirsch. p. 274.
 How to Estimate Plating Costs. Harold Karet. pp. 275-276.
- Metal Industry (New York) Sept., 1934.**
 Storing and Handling Sheet Brass and Nickel. F. A. Westbrook. p. 301.
 The Effect of Some Mill Variables on the Gauge of Sheet Brass. C. K. Skinner. pp. 302-303.
 Treating Waste from Silver Manufacture. Ernest H. Smith. pp. 304-305.
 Rapid Determination of Nickel and Chloride in Nickel Plating Solution. W. R. Meyer. pp. 306-307.
 A Study of the Structure of Electro Deposited Metals. L. B. Hunt. pp. 308-309.
- Metal Industry (New York) Oct., 1934.**
 The Effect of Remodeling a Melting Plant. M. W. von Bernewitz Treating Waste from Silver Manufacture. Ernest H. Smith. pp. 341-342.
 Proposed Cost Accounting and Estimating System for Non-Ferrous Foundries. pp. 343-345.
- Heat Treating and Forging, June, 1934.**
 Coarse and Fine Grained Steels. R. L. Rolf. pp. 271-274.
 Steel for Heat Treating and Forging. J. H. Hruska. pp. 275-278.
 Characteristics of Carbon and Alloy Steels. Edgar C. Bain. pp. 279-284.
 Bolt Bath Quenching. Bernard Thomas. pp. 285-287.
 Wrought Iron and Gas Fuel. J. B. Nealey. pp. 287-290.
 Steels for Heat Treated Gearing. T. R. Rideout. pp. 291-296.
 Furnaces in Wire Drawing Plant. J. B. Nealey. pp. 299-230.
 Laboratory Tube Furnaces. Francis A. Westbrook. pp. 301-302.
 Burning Fuels under Boilers. E. R. Cate. pp. 303-304.
- Heat Treating and Forging, July, 1934.**
 Drums of Heavy Hollow Forgings. Edwin F. Cone. pp. 323-325.
 Effect of Various Alloys in Steel. N. L. Deuble. pp. 326-330.
 Coarse and Fine Grained Steels, Part II. R. L. Rolf. pp. 331-333.
 Quenching Media. W. D. S. Walker. pp. 324-336.
 Characteristics of Carbon and Alloy Steels, Part II. Edgar C. Bain. pp. 339-343.
 Simple Facts about Common Steels. J. R. Miller. pp. 348-349.
 Combustion in Boiler Furnaces. N. T. Pef. pp. 351-352.

Pipe Furnaces at National Tube. J. B. Nealey. pp. 353-354.
 Electric Bright-Annealing Furnaces. Obering Tamele. pp. 355-357.
Heat Treating and Forging, Aug., 1934.
 American Builds Plant in Japan. W. C. Kernaham. pp. 375-376.
 Principles of Heat Treatment. R. G. Williams. pp. 377-381.
 Extruded Steel Forgings. Edwin F. Cone. pp. 382-384.
 The Metallurgist in the Gear Industry. Francis W. Rowe. pp. 387-389.
 Pickling of Mild Steel Sheets. Harold Edwards. pp. 393-399.
 Recent Progress in Metallurgy. T. H. Burnham. pp. 400-401.
 Insulating Firebrick Applications. M. J. Terman. pp. 403-405.
 Improving Wire Annealing Equipment. T. B. Bechtel. pp. 406-407.
 Furnaces for Heating Pipe. J. B. Nealey. pp. 408-409.
Heat Treating and Forging, Sept., 1934.
 Accurate Temperature Control Essential to Good Steel. W. C. Kernabran. pp. 436-439.
 Principle of Heat Treatment, Part II. R. G. Williams. pp. 440-444.
 Flakes in Ball Bearing Steel. V. Chernishoff. pp. 445-446.
 The Blistering and Formation of Scale. R. Griffith. pp. 447-450.
 Butane for Tool Dressing. Harry Sherman. pp. 457-458.
 Enamelling Sanitary Ware. J. B. Nealey. pp. 459-461.
 (鹽澤)

日本化學會誌 第55巻 第9號
 有機質沈澱の電壓滴定(第1報) オキシソ・アントラニル酸及び是等によりて沈澱する金屬の定量 北島 一平 (884)
 有機マグネシウム化合物(1) フェニル・パラ・トルエンスルフォン酸エステルとフェニルマグネシウムブロミドとの數種の溶媒中に於ける反應について 嶺 國夫 (905)
日本化學會誌 第55巻 第9號附録 綜合講演集
 輕金屬の製造、精製及び電鍍に於ける近年の進歩 龜山 直人 (131)

電氣化學 第2巻 第10號:
 電氣爐製鉄に於ける燐の還元平衡 向山 幹夫 (359)
 錫鍍金法の研究 島田 貢 (367)

北海道石炭鑛業會々報 第241號
 切羽支柱としての瓦斯管に就て 阿部 興 (8)
 昭和8年札幌鑛山監督局管内鑛業の概況 札幌鑛山監督局 (15)

理化學研究所彙報 第13輯 第10號
 蒼鉛の一新比色分析法 山本 健磨 (1265)

鑄物 第6巻 第10號
 ダービル鑄造法に依るアルミニウム青銅鑄物に就て 海軍艦政本部 (1)
 小型鑄物の單價査定法に就て 大西信三郎 (696)
 船尾軸被金鑄造法(附) 海軍艦政本部 (719)
 非鐵合金表 天利 義昌 (739)

住友電線彙報 第3號
 錫鍍銅線の試験に關する考察(第2報) 橋本 誠一 (15)
 電氣銅熔解中に吸収せられる酸素及び硫黄量の變化並に銅線に及ぼす影響に就て 榛葉久吉、吉田群一 (25)
 不銹鋼線の性質及び用途 江塚 保 (60)

電氣學會雜誌 第54巻 第10冊
 耐久磁石 玉置 正一 (1096)
 磁氣材料 二宮 弦 (1100)

工政 第174號
 最近我鐵鋼界所感 末兼 要 (16)
 過去十五年に渉る軌道用品を中心とする製鐵技術との提携 井上 隆根 (19)

住友電線彙報 第2號

電線界の趨勢 別宮 貞俊 (1)
 O. F 式高壓用蓄電器 北川一榮、松本貞一 (11)
 錫鍍銅線の試験に關する考察(第1報) 橋本 誠一 (29)
 銅線引に要する力 根岸 元凱 (42)
 鉛合金の時効硬化に就て(第2報) 榛葉 久吉 (49)
 商用銅線の導電率圖表 宮本 至 (71)
 電車線の斷線原因と SDS-10 銅合金電車線 福田 磯吉 (80)

海外經濟事情 昭和9年 第43號
 歐洲鋼カルテル情報(昭和9年8月15日附在英、松山商務參事官報告) (8)
 獨逸鐵鋼原料輸入許可制度及鋼管工場に關する省令(昭和9年9月1日附在獨、長井商務書記官報告) (45)

明治專門學校々報 第4巻 第1號
 石炭液化の研究 栗原鑑司、伊木貞雄 (1)

探鑛冶金月報 第12年 第10報
 精銅反射爐用自働粉炭燃焼裝置に就て 小島 鎮雄 (246)

海外經濟事情 昭和9年 第44號
 アルミニウム並同製品輸入統計(昭和9年9月7日附在) (36)
 バタヴィア、越田總領事報告)
 鐵及鋼鐵市況(昭和9年7月18日附在智、矢野特命全權公使報告) (749)

日立評論 第18巻 第10號
 鑄着鐵の鍛鍊に依る機械的性質の改良 齋藤 哲夫 (41)

電氣協會々報 第154號
 電氣事業に關する所感 祝 島男 (1)
 電氣事業の使命 井上昱太郎 (4)
 電氣法規調査委員會第1回報告 (42)

土木學會誌 第20巻 第10號
 道路鋼橋の鋼重(單構之部) 三浦 七郎 (1127)
 軌條の挫屈に就て 堀越 一三 (1187)

燃料協會誌 第13年 第10號
 ガソリン機關燃料の揮發性に關する 二、三の問題 永井雄三郎 (1211)
 再び本邦石炭事情に就て 桑村剛太郎 (1218)
 鋼製ガス管の製造法に就て 望月 要 (1233)
 メタンガスに就て 菅 眞三 (1246)
 燃料縱横談 川久保修吉 (1251)

朝鮮鑛業會誌 第17巻 第3號
 沙里院炭鑛の採掘法に就て 小堀 巖 ()
 本邦に於けるアルミニウム製鍊の現況と將來の豫想 石川 留吉 (311)
 朝鮮新産鑛物雜誌 木野崎吉郎 (323)
 朝鮮に於る日本鑛業株式會社所屬主要鑛山の現況に就て 越宮朝太郎 (342)

海外經濟事情 昭和9年 第45號
 江西省礦產狀況(昭和9年9月10日附在廣東、服部總領事代理報告) (7)
 緬甸鑛業概況(1933年)(昭和9年9月5日附在蘭貢、湯谷領事館事務代理報告) (28)
 墨國鑛產狀況(上半年)(昭和9年8月23日附在墨、堀特命全權公使報告) (67)

電氣製鋼 第10巻 第10號
 低溫度に於ける鋼の性質に就て 本多光太郎 (411)
 新設電氣製鋼爐設備に關する研究 宮内 弘平 (416)
 中滿俺鋼鉄の低溫度衝擊試驗 金友 濤聲 ()

日本鑛業會誌 第50巻 第594號
 アルミニウム製造の現況 龜山 直人 (845)
 鋼索撚子の壽命に及ぼす豫荷重の影響に就て 水田準一 (857)
 金銀鑛脈の老幼を論じて金銀の分布に及ぶ 岩崎 重三 (866)

日立機械評論 第18號
 鑄着鐵の鍛鍊に依る機械的性質の改良 齋藤 哲夫 (41)

九州鑛山學會誌 第5號 第2號
 北米合衆國鑛山見學談 山根 新次 (75)
 探鑛學の研究に就て 佐野秀之助 (98)

世界に於ける亜鉛工業の趨勢
至硬合金とその實用
エンヂニヤリング Vol. 23, No. 11
金屬電弧銲接設計法入
低炭素鋼の滲炭及焼入に就て
鞍山鐵鋼會雜誌 第51號
熱管理に就て
印度南洋方面の鐵鑛に就て
大孤山鐵鑛の粒子の大き
シャモット煉瓦の二、三の性質
金屬 第4卷 第11號
砲金の焼入れ
硬度測定法の比較
高温に加熱する事に依る鑄鐵の生長に就て
鐵鋼史
線圖で示した燒鈍溫度
銲接協會誌 第4卷 第5號
名古屋市における銲接の現況
獨逸電氣銲接界の概況
銅及銅合金の銲接
電弧銲接法による銲着金屬の電磁氣的性質に就て
U. D. C. 制度に依る電弧銲接試験報告
浦賀船渠會社浦賀工場 (327)

應用物理 第3卷 第11號
X線管球の一新考案
アルミニウム単一結晶板を刃によりて打切りし場合の影響
鉛の表面の酸化皮膜の厚さに就て
石炭灰の耐火度の一測定法
微粒子現像の機構に就いて
變壓器を應用した熱分析
機械學會誌 第37卷 第211號
鍛錬性に富む平板材の壓延工程に於ける主應力の算定
金屬の疲労と耐久性
北海道石炭鑛業會々報 第242號
地球物理探鑛法の實用的價值
九州帝國大學工學彙報 第9卷 第4號
部材の光弾性試験に必要な常數の實用的計測法
過期的に流れる瓦斯量の測定
石油の高壓熱分解に就て
鑄物 第6卷 第11號
或る用途より見たる冷硬鑄鐵とマルテンシチクマンガン鋼
(硬質マンガン鋼)の比較に就て
高温に於ける合金鑄鐵の成長
電氣學會雜誌 第54卷 第556號
直流電弧銲接機の特性と其の試験法
送電用鐵塔に對する風壓
海外經濟事情 昭和9年 第47號
支那金銀輸出入最近10箇年統計 (昭和9年10月19日附在支、横竹商務參事官報告)
暹羅國鐵道の電氣及蒸氣機關車輸入狀況 (昭知9年7月31日附在盤谷、宮崎領事報告)
英國のヴィツカースと其系統會社 (昭和9年10月10日附在英、松山商務參事官報告)
ユーゴスラヴィア國對外貿易概況 (昭和9年8月30日附在、藤田特命全權公使報告)
ラトヴィア國外國爲替及貿易に關する諸法律 (通商局) (51)

塚本 俊郎 (101)
田村 精一 (113)
三好 巽 (426)
小熊 容徳 (434)
フランツ、ヨブラー (1)
吉村 萬治 (15)
三田 正揚 (31)
三田 正揚 (37)
戸波 親平 (361)
石澤 命知 (363)
菊田多利男 (369)
佐々木新太郎 (375)
(379)
上田 嘉一 (285)
山本 幸男 (288)
大西 巖 (294)
岡田 實 (302)
吉田卯三郎、田中秀雄 (403)
磯谷貞次郎 (403)
島津 新一 (406)
香坂要三郎 (408)
藤澤 信 (416)
橋本 宇一 (419)
山ノ内 弘 (783)
淺川 勇吉 (810)
青山秀三郎 (1)
久野重一郎 (125)
岡本勇象、木戸英雄 (138)
加藤常太郎、野村久直 (161)
伊丹榮一郎 (775)
藤原 唯義 (795)
岡本 赴 外2名 (1117)
太刀川平治、大迫貞治 (1169)

府立東京商工獎勵館々報 第44號
滿洲朝鮮に於ける金屬鑛業と其の資源
山本 有三 (4)
海外經濟事情 昭和9年 第46號

獨逸近年の輸入防遏策により本邦品の受けたる打撃 (昭和9年9月21日附在獨、長井商務書記官報告) (25)
白國輸入炭化石灰許可制實施 (昭和9年9月14日附在白有田特命全權大使報告) (45)
米國の油井開掘狀況 (上半期)(昭和9年9月18日附在=ユーオルレアンス佐藤領事代理報告) (56)
米國石油生産狀況 (7月)(昭和9年9月13日附在=ユーオルレアンス、佐藤領事代理報告) (57)
埃及の新工業勃興と英國の對埃貿易策 (昭和9年9月20日附在ポートサイド、大野領事代理報告) (63)

石炭時報 第9卷 第11號
燃料動力界に於ける石炭の將來 大島 義清 (2)
水力火力の併用と發電經濟 三ツ井新太郎 (18)
山東省の石炭經濟事情 (三) 外務省通商局 (33)

東京工業大學々報 第3卷 第10號
材料の疲労過程に於ける機械的性質の變化と疲労の恢復に就て 山田良之助、松岡陽三 (652)

工業化學雜誌 第37編 第11冊
鹽化第一銅鉛鹽を用ふる電氣分銅法 (第12報) 陽極夾雜物としての金の行爲 龜山直人、田邊隆一 (1566)

研究報告(八幡製鐵所) Vol. XIV No. 1
高爐セメント及び鐵滓パラスの性質に就て 谷 宗雄 (全卷)

日本化學會誌 第55巻 第10號
アルミニウムを主成分とする Cu-Al 及び Ag-Al 合金の示差熱膨縮の研究に就て 川合 照 (1002)
有機化合物を用ふる分析化學 (第1報) サルチルアルドオキシム及び電解法を併用せる銅とカドミウムの分離定量 石橋雅義、岸 春雄 (1060)

理化學研究所彙報 第13輯 第11號
Al 酸化皮膜の電解液 (蔭酸) の補正 宮田 聰、宮井素行 (1235)
アルミニウム陽極操作に對する不活動狀態と防蝕に對する新處理法 宮田 聰 (1299)
含水グリセリン溶液に於ける MgSO₄ の高周波電解傳導度 原田 正夫 (1340)

金屬の研究 第11卷 第10號
アルミニウム-銅-珪素三元系状態圖 松山 寛慈 (461)
砂鐵鑄滓の研究 第4報 CaO-SiO₂-TiO₂ 系の過冷却狀態よりの結晶に就て 岩瀬慶三、福島政治 (491)
アントラニル酸に依る金屬の定量 (熱天秤に依る研究) 石丸 三郎 (500)
チタン-窒素-炭素系の研究 第1報 (砂鐵、第36報) 窒化チタンの解離壓及生成熱に就て 小林 正美 (505)
ミシン部分品材料の研究 (第1報) 既製ミシン部分品の材質と其熱處理 岸 本浩 (518)

海外經濟事情 昭和9年 第49號
獨逸製錫工業 (昭和9年10月4日附在獨、長井商務書記官報告) (47)

研究報告 (9年9月) 三菱重工業株式會社名古屋航空機製作所
94 kg Ni-Cr 鋼の燒戻脆性に對する Mo の影響並に再燒戻による脆性 關口 次郎 (1)
航空機用鋼材の熱膨脹 尾形康夫、久野孝重 (41)

朝鮮鑛業會々報 11月號
浮選法に關する基本的考察 (2)
金鑛製鍊會社設立發表 (5)

電氣製鋼 第10卷 第11號
鐵及び鐵合金のスケール生成に就て(其一) N 生 (461)
高速度鋼の高温硬度に就て 金友 濤聲 (472)

採鑄冶金月報 第12年 第11報
加奈陀の製鐵工業 澤村 宏 (267)
幌内炭礦 伊藤 憲吉 (272)